



英語セミナーと国際大会に

是非ご参加ください

支部長 鎌倉 義士
(愛知大学)

支部会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。2024年度は中部支部にとってかけがえのない年となります。8月28日(水)から30日(金)に第63回国際大会を愛知大学にて開催します。大会運営に携わる中部支部の先生方をはじめ、西日本ブロックに属する関西支部・中国四国支部・九州沖縄支部と連携して、国際大会の準備を進めております。会員皆様のご参加を心よりお待ちしております。

今年度は例年開催する支部大会に代わり、講演を主にした英語セミナーを6月1日(土)愛知大学にて対面とオンラインで開催します。セミナーは「The Evolving Landscape of World Englishes and ELF: Perspectives, Challenges, and Future Directions」と題し、国際英語について3人のご講演者をお迎えします。

講演では、まず James D'Angelo 先生(中京大学)は国際英語研究の最新動向について発表して頂きます。その後、池 沙弥先生(名城大学)はレゴブロックの作成過程を動画コーパス化した ELF データの分析によって共同作業における国際英語についてお話しいただき、最後に藤原 康弘先生(名城大学)が教職課程への国際英語の知見の応用についてお話し頂きます。の後、続くシンポジウムにて講演者先生方

で国際英語の未来について話し合います。詳細は、HPまたはプログラムにてご確認ください。皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。

支部執行部のメンバーは支部長が鎌倉義士(愛知大学)、副支部長は今井隆夫先生(南山大学)にご担当頂き、事務局幹事に大瀧綾乃先生(静岡大学)、事務局に内田政一先生(桜花学園大学)、事務局(紀要担当)に柴田直哉先生(名古屋外国語大学)、会計幹事に梶浦真由美先生(名古屋市立大学)です。会員の皆様方のご協力を賜りたく存じます。

目次

支部長挨拶 鎌倉義士 1 頁

講演会報告 1

2023年度 第1回定例研究会 講演
「脳科学と英語教育—世界諸英語を視野に入れてー」
木下 徹(名古屋大学名誉教授)
大石 晴美(岐阜聖徳学園大学)

梶浦真由美 2 頁

講演会報告 2

2023年度 第2回定例研究会 講演
「大規模言語モデルによるテキストの文法性はどこからきているのか?
-言語学の観点から考える Self-attention-」
長谷部陽一郎(同志社大学)

大森裕實 4 頁

研究会報告

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会
大森裕實 6 頁

事務局より

7 頁

講演会報告 1

2023 年度 第 1 回定例研究会 講演

「脳科学と英語教育

—世界諸英語を視野に入れて—

木下 徹 (名古屋大学名誉教授)

大石 晴美 (岐阜聖徳学園大学)

2023 年 12 月 3 日 会場: 南山大学

近年様々な分野において、脳科学からのアプローチに関心が高い。そこで第 1 回定例研究会の中部支部講演会では、「脳科学と英語教育—世界諸英語を視野に入れて—」と題して木下徹先生、大石晴美先生にご講演いただいた。

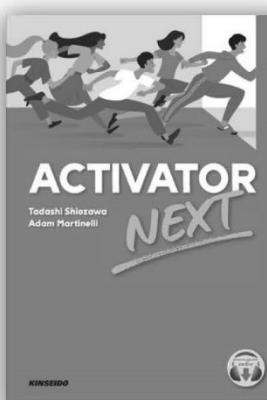
ご講演では、脳科学研究の歴史、内容や研究方法、使用される装置、そして海外や日本の研究について幅広くご紹介いただいた。さらに、両先生がこれまでに蓄積された研究成果について、非常にわかりやすく、解説していただいた。特に、英語学習者の脳活性パターンや、母語と英語の言語間の距離と脳活性状態の関連に関するご研究は、非常に興味深いものであった。

まず最初に、脳科学研究の内容と方法についてである。脳科学研究は、脳の様々な部位の活動を計測し、脳がどのように機能しているかを理解しようとする研究で、3 つの説が存在する。脳全体で様々な機能を担っている全体論、脳部位の一つ一つに役割があり、機能と脳部位が 1 体 1 対応である局在論、特定の機能が

中心的な役割を担っている全体論と局在論を融合した偏在論で、今のところ、それぞれの特定の部位が中心的な役割を果たすが、脳部位同士が連携して機能を担う偏在論が有力であると説明された。

次に脳科学の歴史についてである。1800 年代の Gall 骨相学が始まりで、「頭蓋骨の形状を観察するだけで、人の性格や能力を推測できる。」と説かれ、科学的な根拠に乏しいものであった。続いたのが、1936 年に発表した Dax の症例から始まった失語症の研究である。ポール・ブローカは、「言語が理解はできるものの発話ができない症状」が、特定の部位 (ブローカ野) の損傷に起因すると結論づけ、また、カール・ウェルニッケが、「発話は比較的問題ない一方、言語の理解に障害がある症状」をウェルニッケ野の損傷に起因していると結論づけた。更に 1989 年には、様々な機能が特定の領域に局在するというブロードマン局在論が提唱され、ブロードマンは脳を 50 の領域に分類し、それぞれ異なる役割を果たしている可能性を示唆した。

次にご講義いただいたのは、脳活動を計測する機器とそれぞれの特徴についてである。それによると、脳活動による血流変化を測定する fMRI (機能的磁気共鳴法) は、空間分解能 (脳の細部の活動を精密に計測する能力) が高く、かつ、脳深部も含む全領域が測定できるが、時間的分解能 (脳活動による変化を即時



Activator Next

大学生の自信を促す英語コミュニケーション

塩澤 正 / Adam Martinelli 著

大人気の Activator シリーズ最新刊！

多彩なアクティビティ (ロールプレイや対話活動、ディスカッション) を通して、大学生必須の会話力をグレードアップ

¥1,900 (税込 ¥2,090) B5 判 120 pp. 全 15 章 ISBN978-4-7647-4178-2



金 星 堂

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-21
電話 03-3263-3828 FAX 03-3263-0716
text@kinsei-do.co.jp http://www.kinsei-do.co.jp

に精密に捉える能力)は相対的に低いのに対し、電位的変化を記録する EEG(脳波計)は、時間分解能は高いが空間分解能は低い。他方、脳活動による微弱な磁場の変化を捉える MEG(脳磁計)は時間分解能も空間分解能も優れているが、fMRI と同様大規模、高価であるのに対して、近赤外光を用いて血流変化を測定する fNIRS(近赤外線分光法)は、時間分解能、空間分解能は共に中程度であるが、EEG と同様、装置の簡便性が優れている等々、脳活動計測の各機器の利点と欠点をご説明いただいた。

更に、日本や海外で行われたさまざまな研究について、酒井(2001)は発話機能だけでなく文法処理もブローカ野が担うことを明らかにしたこと、Crinion et al.(2006)は、左尾状核がバイリンガルの 2 言語の切り替えに関与することを報告したこと、そして McLaughlin(2011)が既に第二言語習得においてコントロール処理と自動的処理のモデルを提唱していることなど、興味深い研究を紹介してくださった。

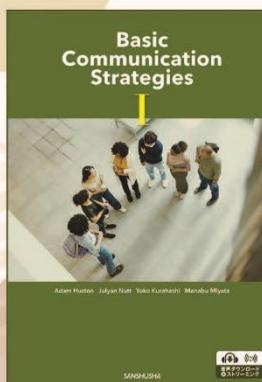
その後はお待ちかねの、大石先生と木下先生の共同研究についてである。

紹介された一つ目の研究では、脳血流量の変化の説明として、McLaughlin(2011)のモデルを用い、上級学習者は言語処理が自動化しているため言語負荷が少なく、脳血流増加量が少ないのでに対し、初級学習者はコントロール処理をしているため言語負荷が多く、脳血流

増加量が多いと仮説をたてた。仮説検証のため、英語を日本人学習者に聞かせ、高価な fNIRS 機器をレンタルし、限られた時間で実験を行った。途中、学習者の脳賦活パターンは実際に様々で、仮説通りの結果が出ないと断念しかけていた際にも、「何か手がかりがあるはず」と、学習者にインタビューを実施した。その中から、「全く理解できなかった」という初級者の回答を得て、脳活動と習熟度の関係は逆 U 字となる結論に至ったことが説明された。つまりは、初級者は、英語を聴いた場合等、理解できずに言語処理ができないため脳の活動量は小さいが、中級者になると活動が大きくなる。しかし、上級者となると処理が自動化に近く活動が再び下がるという、脳科学的な根拠からの説明になるほどと納得させられた。

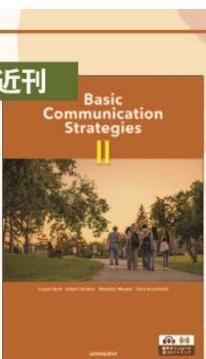
2 つ目は、英語と母語の距離の違いが学習に影響を与えるかどうかについて検証した研究である。母語の違う学習者が、英語を聴いたり読んだりしている時の脳の活動量を fNIRS で計測することにより、その認知的負荷の違いを明らかにされた。その結果、従来型のペーパーテストではほぼ同等の熟達度でも、他の地域の学習者に比べてインド・ヨーロッパ語族圏の英語学習者が英語を聴いている際の脳血流量は少なく、同じ英語習熟度でも、母語と学習語の距離によって認知的負荷が異なる可能性が示唆された。

最後に、日本語英語、台湾英語等、通じる英



新刊 大学生のための会話テキスト
ベーシック・コミュニケーション
〈ブック 1〉
Adam Huston · Julian Nutt · 倉橋洋子 · 宮田 学
B5 判 / 80 頁 / 定価 2,200 円 (税込)

大学生にとって必要とされるのはどのような英語か、どのようにすれば会話を楽しめるか——学生に身近なトピックを題材に、英会話をスムーズに進めるためのストラテジーを学び、発信力を身につけます。



新刊 Basic Communication Strategies
〈ブック 2〉
SANSHUSA

語であれば母語話者の英語でなくても許容される、「World Englishes」という考え方がグローバルスタンダードになってきている現代において、母語話者の英語が重視されることには、実社会に即してない傾向であると述べられた。その上で、今後の展望として、異なる英語によって、脳活動は変化するのかどうか、明らかにされる試みについてお話しㄧだいた。例えばヨーロッパ言語話者の英語を聞いた場合よりも、日本語、韓国語、中国語のように距離が近い学習者の英語を聞いた場合の方が、認知的負荷が小さいのか、同じ英語でも非母語話者の英語を聞く場合は脳活動が異なってくるのか明らかにすることは、非母語話者が圧倒的に多い現代において、非常に重要な研究課題であると締め括られた。

ご講演をお聞きして、効果的な第二言語習得について考察する際、脳のメカニズムを考慮すると、見えない側面も見えてくるように思われた。今後、脳データ等の科学的根拠に基づく効果的な学習法が明らかになる発展性を感じられた。また脳データのみで明確な結果が得られなかつた場合でも、諦めずにインタビューや他の手法を取り入れて分析し、最終的に納得いく結論を得たご経験等、未開拓の領域から研究を積み上げていかれた、脳科学、fNIRS研究のフロンティアとしてのご苦労も共有いただき、研究者としての理想の姿を示していただいた。

梶浦真由美(名古屋市立大学)

講演会報告 2

2023 年度 第 2 回定例研究会 講演

「大規模言語モデルによるテキストの文法性はどこからきているのか?」

-言語学の観点から考える Self-Attention-」

長谷部陽一郎(同志社大学)

2024 年 3 月 2 日 会場:名古屋市立大学

JACET 中部支部 2023 年度第 2 回定例研究会の講演講師としてお招きした長谷部陽一郎教授は、認知言語学及びコーパス言語学を専門とし、理論的研究者であると同時に、みずから TED Corpus Search Engine (TCSE) や Monadic Chat (AI チャットポットシステム) を創作する実践的研究者である。英語学専攻の学生がリサーチに活用する COCA Corpus の検索法についても詳細なハンドブックを SNS 上にアップされており、筆者の指導した院生・学部生も随分とお世話になったことを(本紙面を借りて)改めて感謝申し上げたい。

本講演は、生成 AI が創出したテキストが日常に溢れる近未来がそこまで迫っており、すでに大規模言語モデル(LLM)を英語教育に活用する可能性や方法について研究が進んでいく現在、「人間にしかできないことがある」という側面を明らかにするために、LLM について知識を深めることを目的としたワークショップであり、蒙を啓くとはこうしたことかと実感せずにはおかぬ充実した内容であった。



成美堂 2024 年度 新刊のご案内

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-22
TEL 03-3291-2261 / FAX 03-3293-5490

Global Gate -Video-based Four Skills Training-	
Basic / Intermediate / Upper-Intermediate	各 2,970 円(税込)
Global Perspectives Reading & Writing	
Book 1 / Book 2	各 2,750 円(税込)
Active Reading Strategies Book 1	2,750 円(税込)
Science Inspirations	2,200 円(税込)
AFP World News Report 7	2,860 円(税込)
Meet the World 2024 -English through Newspapers-	2,310 円(税込)

AN AMAZING AVENUE FOR THE TOEIC® L&R TEST 400	2,750 円(税込)
A COMMUNICATIVE APPROACH TO THE TOEIC® L&R TEST Book 3: Advanced	2,530 円(税込)
Tell Your Story!	
-Using Transition Words in English Writing-	2,200 円(税込)
Grand Tour— New Discoveries	2,200 円(税込)
小学校英語科教育法 -理論と実践-【改訂版】	3,080 円(税込)



URL: <https://www.seibido.co.jp>
e-mail: seibido@seibido.co.jp

本講演の概要を記すと次のようになる。「大規模言語モデル(LLM)はどのように文法性を獲得しているのか」をトピック(RQ)として、それに解を求めるため、生成AIの仕組みの基礎を丁寧に概観する。①「ニューラルネットワーク」の働き——求めたい処理の関数 $y=f(x)$ をモデルで近似することを考える仕組み;②「LLMのニューラルネットワーク」——文脈中にどの語に関心(attention)を向けるべきかを決定し、それに基づいて次に来る語の予測を行なう機構を活用してトレーニング(学習)される;③「トランスフォーマー(Transformer)とデータ処理」——前述②の機能を担う機構で、“Attention is All You Need”(2017)において提案された、言語翻訳を目的としたモデルの機械学習アーキテクチャー。当該モデルで2つのブロック:エンコーダー(encoder)とデコーダー(decoder)をもつ。このトランスフォーマー・ブロックは複数スタックされることにより、深層学習と複雑な推論が可能になる／Open AI初代GPTでは12層のTrans. Blockであったが、現在は数百に進化;④「入力データの構築と埋め込み表現及び位置エンコーディング」——埋め込み表現の行列に変換されたテキスト+位置エンコーディングがTrans. Blockに入力される;⑤「Self-Attention機構とは」——内積(dot product)を用いて文中の各単語が他の単語とどのように関連しているかをモデルに学習させる機構をScaled Dot Product Attentionという／GPTでは

複数のヘッドをもつMulti-Head Self Attentionを活用して(=各ヘッドは異なる観点からの注意を向ける)処理を行なう。

これらの知識を踏まえた上で、結局、LLMは明示的な「文法」を与えられていないとはいえ、ある種の「文法性」を獲得しているようである。よって、LLMの内部構造や振る舞いについて観察を進めることで、言語学的示唆を得られると考えられる。具体的には、LLMに看取される「語どうしの関係性を捉える埋め込み表現」「文脈内での空間的情報を担う位置エンコーディング」「文脈内での構成要素間の関連度を抽出するSelf-Attention」「言語の多次元的理解をもたらすMulti-Head化とスタック」が、言語学的には、(1)意味的韻律 semantic prosody (Sinclair 1991); (2)ベース/プロファイル base/profile (Langacker 1987); (3)領域間マッピング domain mapping (Fauconnier 1997); (4)アクティブ・ゾーン active zone (Langacker 1991); (5)照応 anaphora (Chomsky 1981); (6)注意のウインドウ window of attention (Chafe 1994; Langacker 2008)の観点に相互的関連性が認められるのではないか。

最後に、本講演の締め括りとして、「LLMと共存する社会は始まっていることを認識し、英語教育においてその活用を模索する中で、LLM自体の成り立ちについての理解も必要である」という言辞を戴き、身の引き締まる思いであったことを附記しておきたい。生成AIの進

英語で学ぶ地球の未来とSDGs クリティカル・シンキングを養う総合英語
Our World Tomorrow How technology will change our lives
持続可能な開発目標(SDGs)を英語で考える！

南雲堂

〒162-080
東京都新宿区山吹町361
Tel: (03) 3268-2311
Fax: (03) 3269-2486

その他
新刊案内
はコチラ

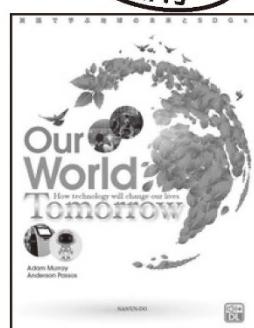


CLILのコンセプトに基づき、パッセージ内の基礎的なボキャブリー学習に焦点を当てながら英文の理解を図る。「4技能+文法」を効率良く学習できるエクササイズを配置。※TOEICレベル400~600点

全15章 各章6ページ構成
著: Adam Murray / Anderson Passos
A4変・126ページ 2,750円(本体2,500円+税)
教授用資料(試験)、音声ダウンロード有

見本請求はメールでも承ります！
e-mail: nanundo@post.email.ne.jp

2024
新刊



歩・発展が英語教育の新局面を拓くことを期待したい。

大森裕實（愛知大学）

研究会活動報告

最新言語理論に基づく応用英語文法研究会 SIG on *Applied English Grammar based on the Latest Linguistic Theories*

本研究会（2012 年度設立）は「言語研究・言語理論の英語教育へ応用」をテーマに、機能主義言語学、認知言語学、語彙意味論、生成文法理論、コーパス言語学、ELF 音声学などの知見を英語の学習・教育に活用できるように整理し、従来の学習英文法では一面的にとらえがちであった文法現象や構文に対して、多面的アプローチによりその説明と導入を試みることを主目的とする。最近では、中部応用言語学研究会（対面式開催）及び機能主義言語学研究会（Zoom 開催）との合同研究例会を中心に活動している。

本研究会の学会貢献実績としては、JACET 国際大会において 2014–2019 年度 6 年間連続して「シンポジウム」を企画・実施し、2021–2023 年度 3 年間連続して「SIG 発表」を実施してきたことが挙げられる。①第 53 回大会（2014 年度）「言語理論の学問知を生かした英語教育 –English Education Activated by New Grammatical Knowledge and Linguistic Insights」；②第 54 回大会（2015 年度）「大学言語教育観に適応する多元的学習英文法の新展開–New Perspectives on Development of an English Grammar for Learning in the Advanced Language Education」；③第 55 回大会（2016 年度）「言語研究の複眼的視点から考察する関係節の効果的学習法–Effective Approaches to “Relative Clause” from Multiple Viewpoints of Language Studies」；④第 56 回大会（2017 年度）「理想的教職課程履修生（英語）に求められる言語知識–言語理論・第二言語習得論からの提案 –What Ideal

Teacher-Trainees of English should Know about the Language: Suggestions from the Perspectives of Linguistics and SLA Theory」；⑤第 57 回大会（2018 年度）「理想的英語教員に求められる「時制」に関する知識 –What Ideal Teachers of English should Know about Tense based on New Approaches」；⑥第 58 回大会（2019 年度）「ELF 時代の理想的英語教師に求められる言語知識–通訳翻訳との親和性 –What Ideal Teachers of English should Know in the Mind in the Era of ELF: Affinity for Interpreting and Translation」；⑦第 60 回大会（2021 年度）「21 世紀 ELF 時代の多様性に対応する言語知識 –Linguistic Knowledge Applied to Diversity in the ELF Era of the 21st Century」；⑧第 61 回大会（2022 年度）「SIG Presentation: 1. Explanatory Grammar from Historical Viewpoints; 2. Image-Based Grammar from Cognitive Linguistic Viewpoints」；⑨第 62 回大会（2023 年度）「SIG Poster Presentation: A Review of a Series of Symposia: 2014–2019」。また、第 1 回 JAAL in JACET 学術交流集会（2018.12.01）においても、SIG ポスター発表「応用英語文法–〈構文〉〈関係節〉〈時制〉の攻究」を行なっている。

最近の活動事例としては、JACET 中部支部 2023 年度第 2 回定例研究会（2024.03.02）における《研究会研究発表》の一環としての「1. 英語移動構文・結果構文の考察と英語教育への含意（都築雅子）；2. メンタルユニバース・グラウンディング理論と文法教育への示唆（今井隆夫）」を特記しておきたい。前者 1 では、Talmy 2000 などの考察に基づき、語彙意味論の視点から、日本語との違いが顕著に現われる英語の移動構文及び結果構文を分析して、どのような説明と教材が効果的であるかを指摘した。後者 2 では、Langacker 2000 などの考察に基づき、認知文法の視点から、従来の学校文法では細分化して説明していた文法事項（be 動詞構文や相・時制・法）を整理し直し、体系的に学習できることを説明した。

本研究会では独自の研究誌を発行していないが、合同研究例会を開催している中部応用言語学研究会の研究会誌『言語研究と英語教育』を活用し、また、JACET Journal に積極的に投稿するなど研究成果を公刊できるように、今後も継続して研究テーマを攻究していくと考えている。

大森裕實(研究会代表)

掲示板

『JACET 中部支部紀要』第 22 号への掲載論文の投稿(学術論文、研究ノート、実践報告、書評)を募集します。奮ってご応募ください。

締切: 2024 年 9 月 20 日

刊行予定: 2024 年 12 月

掲載料: 刷り上がり 1 ページにつき、
1,000 円

問合せ: JACET 中部支部事務局
(紀要担当: 柴田直哉)

投稿方法等の詳細については中部支部ホームページでご確認ください。

中部支部紀要編集委員会

事務局より

◆ 2024 年度英語教育セミナーのお知らせ

中部支部では、8 月に愛知大学にて国際大会を開催するため、支部大会の代わりに「英語教育セミナー」を6月1日(土)に開催します。講演、シンポジウムを予定しております。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

中部支部 英語教育セミナー

テーマ: 「The Evolving Landscape of World Englishes and ELF: Perspectives, Challenges, and Future Directions」

講演・シンポジウム:

James D'Angelo 先生(中京大学)

池 沙弥 先生(名城大学)

藤原 康弘 先生(名城大学)

コーディネーター 鎌倉義士 先生(愛知大学)

参加申し込みフォーム

<https://forms.gle/zvD3ahjvuwsL4G6m7>



なお、第 1 回支部総会も同日開催いたします。支部大会に関する情報は、JACET 中部支部 HP をご覧ください。

JACET 中部支部ホームページ

<http://www.jacet-chubu.org/>

◆ 2024 年度講演会・定例研究会のお知らせ

2024 年第 1 回定例研究会・中部支部講演会は 2024 年 12 月 1 日(日)に、第 2 回定例研究会を 2025 年 3 月 1 日(土)に開催を予定しております。詳細は JACET 中部支部ホームページに掲載予定です。

◆ 2024 年度 JACET 国際大会のご案内

第 63 回国際大会は 2024 年 8 月 28 日(水)~30 日(金)に愛知大学で開催されます。

大会テーマ

「高等教育における英語教育の立ち位置を考える」

“Positioning ELT in Higher Education”

JACET 大会ホームページをご覧ください。

<https://www.jacet.org/convention/2024-2/>

◆ 新入会員のご紹介

2024年1月から2024年5月までの中部支部所属新入会員は以下の方々です。
(敬称略、入会順)

中根 香代子（金城学院大学(非常勤)
喬 婉殊（名古屋大学大学院(大学院生)
市川 裕理（豊田工業高等専門学校）
ジャンボル ケビン（中部大学）
エルミタヘル ホーサム（名古屋女子大学）

◆ 2024年度中部支部役員(敬称略)

顧問: 倉橋洋子（東海学園大学名誉教授）
吉川寛（中京大学）
理事・支部長: 鎌倉義士（愛知大学）
副支部長: 今井隆夫（南山大学）
事務局幹事: 大瀧綾乃（静岡大学）
事務局幹事(事務局補佐):
内田政一(桜花学園大学)
事務局幹事(紀要担当):
柴田直哉(名古屋外国語大学)
事務局幹事(会計担当):
梶浦真由美(名古屋市立大学)

支部研究企画委員(50音順)
石川有香(名古屋工業大学)、今井隆夫(南山大学)、内田政一(桜花学園大学)、江口朗子(立命館大学)、大石晴美(岐阜聖徳学園大学)、大瀧綾乃(静岡大学)、大森裕實(愛知大学)、岡戸浩子(名城大学)、梶浦真由美(名古屋市立大学)、鎌倉義士(愛知大学)、木村友保(名古屋外国語大名誉教授)、倉橋洋子(東海学園大名誉教授)、小宮富子(岡崎女子短期大学)、佐藤雄大(名古屋外国語大学)、塩澤正(中部大学)、柴田直哉(名古屋外国語大学)、下内充(中部学院大学)、白畠知彦(静岡大学)、杉浦正利(名古屋大学)、鈴木達也(南山大学)、藤田賢(愛知学院大学)、藤原康弘(名城大学)、藤村敬次(愛知工業大学)、三上仁志(中部大学)、吉川寛(中京大学)

支部紀要編集委員会

委員長: 石川有香
委員: 大石晴美、岡戸浩子、塩澤正、下内充、
白畠知彦、杉浦正利、藤原康弘

◆ ニューズレターは会員の皆様のフォーラムです。
ご意見、ご要望等は事務局までメールでお送りください。
投稿も歓迎いたします。なお、メール件名
は【JACET 中部】とお書き添えください。

◆ **JACET 中部支部事務局**

〒 422-8529
静岡県静岡市駿河区大谷 836
静岡大学教育学部 大瀧綾乃研究室内
E-mail: otaki/ayano@shizuoka.ac.jp

JACET 中部支部ホームページ
<http://www.jacet-chubu.org/>

JACET-Chubu Newsletter No. 52

2024年5月27日発行
発行者: 一般社団法人 大学英語教育学会
中部支部 (代表) 鎌倉義士
編集者: 内田政一、江口朗子、大瀧綾乃